

在日コリアンの「祭り」形成と公共化

飯田 剛史

日本の大衆文化（歌謡、映画、スポーツなど）において、多くの在日のスターが日本名で活躍して来たことは良く知られている。近年は、文学、芸術、学術などの領域でも優れた人々が輩出しており、そこでは民族出自を明らかにし本名を名乗ることが普通になって来た。しかしこれら特定領域だけでなく、在日コリアンが日常生活と関わる領域においても多様な文化創造が行われている。私はこれまで在日の宗教・祭りについて調査を続けてきたので、ここで在日の文化創造の事例として「祭り」をとりあげ、その形成と公共化の過程を示し、日本社会における文化的「寛容性」の問題を考えたい。

1. アプローチ

社会認識において政治史的条件は不可欠であるが、これまで一般的であった、在日コリアンを政治史の中の受動的被害者として画一的にとらえる「政治主義」アプローチは採らず、ここではむしろ生活形成者、文化創造者としての生き方を明らかにしたい。在日コリアンの政治史および社会学的構造 - 機能的分析を前段階的作業とし、さらに自己組織性論の視角から多様な生活、文化の形成、創造の過程をとらえる。在日社会の概要把握のためにまず、構造 - 機能分析を用いる。これは一定の有効性をもつが、全体的均衡を前提とする静態性という限界を持っている。自己組織性論は、行為者の意味形成を視角の起点とするものであり、構造-機能論を補う観点として有効であると考えられる。なぜなら今日の在日社会では、不完全、不均衡な構造条件のなかで、多様な意味選択と自己決定が実践されつつあるからである。一般の日本人にとって「慣習」的で「自明」な行為が、在日コリアンにおいては戸惑い、躊躇、障害を伴う選択、決断として行われることが多い。構造的矛盾・不条理状況のなかでの意味形成と自己決定、すなわち行動の自己組織化の経験が、今日の在日の文化創造のエネルギーにつながっているといえるのではない

だろうか。

2. 在日社会の構造と変動（1980年代以降）

まず、在日社会の構造特質をつかむために、それを支える経済、政治、結合、文化の4つの主たる機能領域の概要をあげてみよう。

経済領域：底辺からの出発、就職差別（ホワイトカラーからの排除）による諸自営業（焼肉、飲食、風俗、パチンコ、ヘップサンダル、ケミカルシューズ、カバン、土木建設、部品製造など）への職業特化をへて経済生活基盤の確立へ

政治領域：外国人登録法下の管理体制、「民団」・「総連」の対立による共通政治目標設定不能、反差別運動（就職、入居、指紋押捺など）

統合領域：公式組織よりネットワーク（同郷、親族、宗教など）に比重

文化領域：生活文化の日本人との均質化と民族的自己主張との同時進行、大衆文化の在日スター達、民族文化運動（言語、本名、農楽、宗教、祭りなど）

ここから在日社会の構造的な特質を考えると、経済領域を別として、政治、結合、文化それぞれの領域で機能要件を十分に満たしていないことが指摘できる。すなわち経済領域では在日コリアンは今日、差別的な条件のなかではあるが、日本経済のなかで一定の地歩と生活水準を確保している。しかし政治領域では「民団」、「総連」の対立と影響力の限界から共通目標の設定・達成の機能は満たされず、結合領域では互いに閉鎖的な血縁・地縁の比重が大きく全体的な統合を欠き、文化領域でもアイデンティティおよび民族教育、宗教、祭りなどでの関心の拡散性が顕著である。

このように在日社会は、構造的に安定・均衡したものではなく、拡散・解体の要因を基本的に抱えつつ、差別と国籍による民族境界とネットワーク関係によってかろうじて同一性を維持しているといえるだろう。

このような状況のなかで80年代後半から90年代にかけて、つぎのよ

うな変動がみられる。

経 済：経済的地位の向上とバブル経済崩壊後の危機

政 治：「民団」「総連」の対立やや緩和、入国管理法改正（指紋押捺撤廃）地方公務員、公立学校教員、一般企業への採用緩和、地方自治参政権運動

統 合：市民的連帯（少数性の壁）

文 化：大衆文化・スポーツに続き、文学、芸術、学問領域での在日の輩出。「在日文化」の顕在化、公共化

3．祭りの形成：80年代成立の三つの祭り

80年代の在日文化状況の一つの特質として「祭り」の形成があげられる。ここでは代表的な「祭り」として「生野民族文化祭」、「ワンコリア・フェスティバル」、「四天王寺ワツソ」をとりあげたい。これらの内容は全く異なるものであるにも関わらず共通の特質をもっている。すなわち共通テーマとして「民族」を掲げている点、特定の宗教的伝統をもたない点、少数の個人やグループの発意によって始められヴォランティアによる大きな広がりを獲得し今日も流動の過程にある点である。

1)「生野民族文化祭」は、第1回が1983年大阪市生野区で公立学校の校庭を借りて、農楽やマダン（広場）劇、民俗遊戯などを中心に催された。ここではいくつかの「民族的伝統文化」が選り直され、再創造される。若い世代にとって「民族文化」はもはや生得的で自明なものではなく、自覚的に求め、選び、学ぶべきものとなっている。そしてこの選択のあり方と複数グループの参加によって、「祭り」は多様な創造的展



写真1 生野民族文化祭 農楽パレード（1988年 写真 筆者）



写真2 同 布舞編(同)

開の可能性をもちうるのである。

生野民族文化祭は、ホスト文化への対抗性が強く、参加資格は、韓国朝鮮籍者に限られている。差別・抑圧されてきた者のカミングアウト、自己表現の意図がこめられているからである。生野民族文化祭は、2002年秋に第20回を期して終了した。しかし、この祭りは、全国の在日集住地域の若者たちに影響を与え、各地に「マダン」と呼ばれる祭りが生み出されている。

2)「ワンコリア・フェスティバル」は、1985年に第1回が始まった。野外音楽堂でさまざまな分野の在日のミュージシャンや芸術家がパフォーマンスを繰り広げるもので、日本人も参加し、韓国、北朝鮮、中国延辺朝鮮族自治区、アメリカ合衆国からも参加団体がある。目的は、南北対立を越えた「ワンコリア」の意識を、祭りを通して形成しようとするものである。



写真3 ワンコリア・フェスティバル(写真 同1994年パンフレットより)

3)「四天王寺ワッツ」は、1990年に第1回が始められた。古代朝鮮から多くの人々が渡来し高度の文化を伝えたことを、約3,000人のパレードと四天王寺での聖徳太子による出迎えの儀式によって表現するものである。これは関西興銀（在日社会最大の金融機関）理事長李熙健（イ・ヒゴン）氏の発意と、上田正昭氏・猪熊兼勝氏ら日本人歴史学者の計画・考証によってプロデュースされた。2001年度以降は、スポンサーである関西興銀の経営破綻により中止となったが、復活の努力が続けられている。

これらの「祭り」は、在日コリアンの新しい文化を、公共の場で表現



写真4 四天王寺ワッツ（写真 同1992年パンフレットより）

	生野民族文化祭	ワンコリア・フェスティバル	四天王寺ワッツ
開始年	1983年	1985年	1990年
参加者	生野区の在日コリアン	在日のプロ、セミプロの芸能関係者	在日実業家、日本文化人、在日ヴォランティア
場 所	生野区内、校庭	大阪城野外音楽堂など	谷町筋、四天王寺
内 容	農楽パレード、民族舞踊、劇、遊戯	ジャズ・ブルース・舞踏、演劇・映画	渡来人・朝鮮使節のパレード、文化授受のセレモニー
メッセー ージ	在日若年世代への「民族文化」による連帯意識、アイデンティティ形成の呼びかけ	在日若者へのポピュラー文化による、「ハナ」（統一）の呼びかけ	古代朝鮮から日本への人と文化の伝来を表現し、在日コリアンに誇りを与え、東アジアに開かれた大阪のあり方を訴える
共通性	80年代に創始／内容の創造性（非伝承性）／非宗教性（世俗性）／在日人権運動の時期／在日経済力向上期／「公共化」、新しい「大阪の祭」として浸透		

し創造する運動であり、マスコミがしばしば取り上げ、大阪の新しい祭りとして幅広く認知されるようになってきた。日本人と在日コリアン双方の意識を変革するはたらきをもつといえるだろう。

4. 「民族祭」の自己組織化

民族音楽や舞踊は、戦後民族系学校で教えられ、その後、サークルや教室でも教えられた。その中からそれを専門的に習得するために韓国に留学し、日本に戻ってその教師になる人も現れた。そしてこの運動は、次の発展段階に達する。すなわちこのようなさまざまな「民族文化」運動の成長の過程で、一つの場に結集し、「祭り」という総合化された形態をもつに至るのである。

生野民族文化祭は、一つのリーダーシップのもとに、「民族文化」の個々の要素を統合し、さまざまなグループを連結することによって構成されている。その意味でこれは民族文化運動のより高次の段階を画するものであった。

民族文化祭は、種々の民族文化運動を新たに総合ないし編集する試みであり、目的、文化要素および参加する人々とグループにより多様な形に展開する可能性をもっている。それは「差異化の運動が協力しあって、既存の意味（差異）体系に割り込み、みずからの居場所を確保するような自己組織化の運動」[今田 1994 p.17]ということができる。その中心演目の「農楽」は、1970年代に韓国で進行した急速な都市化と地方農村の衰退に対する反作用として起こった民族文化運動の中で、新たな民族的伝統として再創造されたものである。すなわち各地の民俗文化を集めた政府主催の民俗文化祭がしばしば行われ、その中で全羅南道の農楽がとくに色彩的でダイナミックなため、韓国の代表的な伝統民俗文化として広まったものである。またこれは韓国の学生運動にも取り入れられた。これはひとつの「発明された伝統」といえる。生野民族文化祭では、このような発明された「民族文化」の諸要素が採用されている。

その目的は、「ひとつになって育てよう 民族の文化を！ ころを！」という標語に示されるように、在日コリアンの間に南北対立を越えた共通の民族的連帯意識と民族的アイデンティティとを創り出すことである。そこには日本文化ないし日本人への対抗性の要因が含まれている。日本人は、見物は歓迎されるが出演することはできない。金徳煥

（キム・トツカン）実行委員長によると、「これは抑圧されてきた在日の若者の自己表現であり、趣味で韓国舞踊を習っている日本の人と一緒にすることはできない」。この対抗性を通して、民族としての共同性がアピールされる。

「生野民族文化祭」は2002年をもって終了した。理由として「続けていくことに疲れた」「すでに意義を果たした」などが語られている。しかしこの祭りに触発されて各地に生み出された祭りには、次のようなものがある。ウリマダン（福岡市：1990年3月から）、「福岡三一文化祭」、「長田マダン」（神戸市：1990年から）、「芦屋マダン」（芦屋市、1991年から、日本人、インド人、華僑、アメリカ人も参加）、「宝塚民族祭」、「尼崎民族祭」、「伊丹マダン」、「東播磨マダン」、「箕面セツパラム」、「東九条マダン」（京都市；1993年より）、「神奈川アリラン祭」（川崎市）など。

これらはそれぞれ特色をもっているが、京都で行われる「東九条マダン」をあげてみると、ここでは日本文化への対抗性よりも、日本人との共生、被差別者を含むさまざまな地域住民の連帯というテーマが掲げられており、日本人も出演者、運営委員として参加している。東九条は、京都市で約1700名の在日が住む地域であり。祭りは、ここにある「希望の家カトリック保育園」での在日と日本人子弟への韓・日両文化の教育から発展してきたものである。演目のうちには、和太鼓グループとチャング（長鼓）の競演も含まれている。ここでの主テーマは「民族」を含み込んだ「共生」にある。生野民族文化祭の影響は大きいですが、その発展形態は多様な方向をとりうることを示している。

ワンコリア・フェスティバルでは、さまざまな文化ジャンル（ジャズ、ロック、シャンソン、演歌、フォーク、演劇、映画・CM制作など）におけるプロないしセミプロの出演者のパフォーマンスを中心に、在日の「伝統民族文化」、本国や在中国（延辺朝鮮族自治区）のコリアンの芸能文化を集めている。その目的は、生野民族文化祭との共通点である南北の民族的連帯に加えて、全世界の汎コリアン的な連帯をも志向するものである。ここではコリアンと日本人の仲間も加えたジャンルを問わない（「民族文化」にこだわらない）パフォーマンスを集めることを主眼に置いているので、日本文化との対抗性の要因は相対的に稀薄である。実行委員長鄭甲寿（チョン・カプス）氏は、在日学生運動に加わっていたが

その政治主義に疑問を感じていたところ、生野民族文化祭の発足に参加し、「祭り」を通じた「ワンコリア」運動の可能性と有効性に気がついて、新たな「祭り」作りをめざした。町工場を経営していた家族の支援により「祭り専従」として活動することができた。2002年には大阪市も協賛団体に加わっている。

四天王寺ワッツでは、古代朝鮮からの渡来人の文化が日本文化のルーツであることを大阪住民にアピールしようとする。目的は、在日コリアンの社会的地位の向上、日本人とコリアンとの親和意識の形成および大阪の新たなオリエンテーションであるアジアとの結びつきの提示である。ここでも日本との対抗性よりも「理解」「共生」のモチーフが重視されている。2年間の中断のあと、在阪の日本企業も参加してNPO法人「大阪ワッツ文化交流協会」(理事長・井植敏サンヨー電機会長)として再組織化がなされ、2003年秋に規模を縮小して難波京史跡公園で再開が計られた(雨天中止)。この祭りは「在日の祭り」から「大阪の祭り」としての性格を強めつつある。

5. 「民族祭」の象徴性と文化機能

これら三つの「祭り」は何らかの意味で「民族」を主題化している。そして「民族」は象徴として表現されることを通してのみ実在化する。すなわち、それは「象徴的実在」(ペラー 1974)である。「民族」という社会的カテゴリーは、没主観的に経験的事実として存在するのではなく、象徴作用を通して、主体的に構成され意味づけられてはじめて人々の中に実在化するものである。

これらの「祭り」において象徴としての「民族」は、聖性と曖昧性を帯びている。

これら三つの「祭り」は、特定の宗教の枠内にあるものではない。これら「祭り」の中の「聖なるもの」は、宗教の領域を越え出て、「民族」を直接に聖化する機能をはたしている。「祭り」において聖化された「民族」の共通体験は、その場に一つの連帯感をかもし出す。そして「祭り」に毎年参加するメンバーの間には、徐々に持続的なネットワーキングが形成されてきた。またこれに刺激を受けて、別な地域であるいは別なグループで民族文化活動が展開される場合にも、ネットワーキングの拡大をみることができる。

しかし、それがただちに参加者と観衆全員を結ぶ確固とした社会連帯につながるわけではない。多くの観衆にとってはこの連帯感はずつかの間のもので、「祭り」が終われば霧のように消えてしまう。「祭り」を支えてきたのは、インフォーマルでヴォランティアなコア・グループであるが、それは公式組織あるいは地域集団（氏子会、自治会など）などの基礎をもたないからである。

「祭り」がただちに在日コリアンの広範囲な社会連帯につながりにくいもう一つの理由は、そこでの「民族」象徴が曖昧なものにとどまっていることである。それはまず、これらの「祭り」において「民族」象徴そのものの表現形式が不定形で、宗教的象徴である神像や仏像のように共通に認識された形式で了解されているわけではないからである。「在日」の場合、現在、自らの存在および「祖国」について共通に合意する呼称も旗印もち得ないことがその大きな制約となっている。また「民族」象徴の指示対象のイメージもごく曖昧である。「南北在日の連帯」あるいは「世界のワン・コリア」といっても、具体的な政治的プログラムに基づいているわけではない。それらは漠然とイメージされるユートピアでしかない。したがって、政治次元で今のところ、これらの「祭り」が、直接に南北在日の統一という政治機能をもつとはいえない。しかしこれは現状においては逆説的な有効性を発揮しているといえる。すなわち今日の政治状況では、具体的な「統一」案はただちに対立と反目を生み出す原因にしかならないので、逆に「ワン・コリア」「統一」が漠然としたユートピアにとどまるがゆえに、多くの人の参加が可能になっているともいえるのである。

生野民族文化祭の場合、ここでいえることは、在日社会の一定の範囲で新たな民族意識を生み出してきたことである。参加メンバーだけではなくより多くの観衆が、「祭り」を通して、民族イメージと民族的自己意識がネガティブなものからポジティブなものに転換する経験をもった。極彩色で力強いリズムをもつ新しい「民族文化」を経験することによって、貧困や屈辱と結びついていた自民族のイメージを逆転させることができたのである。これらの祭りの経験を通して、多くの在日の若者が、共通の「民族」体験をもち、新たな民族的自己意識をもつようになったといえるだろう。

6. 「在日文化」の公共化

在日コリアンの祭りは、文化次元では、「在日文化」の日本社会での顕在化、公共化という役割を果たしているといえる。

これまで在日の宗教文化は、主として儒教式祖先祭祀や巫俗儀礼などのように私的で内輪の場で行われるものに限られてきたので、一般の日本人の目にはほとんどふれなかった。

しかし、民族祭が創り出され、それがマスコミで報道されることによって、「在日文化」の日本社会でのありかたに一つの確かな変化が起きてきたといえる。このことは近年、一般のマス・メディアにおいても民族名を名乗るミュージシャン、俳優、作家、研究者などの活躍が注目されるようになってきたこととも連動している。

これらの祭りは、テレビのニュースでほぼ定例的に取り上げられ、またいくつかの特集番組で紹介されるようになった。テレビなどマスコミを通して、これらの人々の活動は、今日の日本文化の中のユニークで魅力ある領域として広く承認されてきている。

「祭り」は、このような文化創造の機能を通して、日本社会への在日の積極的参加と社会的地位向上に一定の役割を果たしているといえることができる。

このような「祭り」が現れた背景として、80年代における在日の様々な反差別人権運動の展開が挙げられる。80年代以降のマイノリティ側からの様々な運動は、日本人の市民運動グループによっても支援され、指紋押捺撤廃運動は、マスコミと世論の支持するところともなった。

現在は、「在日コリアン」のみならず、諸外国からの「ニューカマー」が増え、今日の日本社会の課題として「文化的多元化」、「共生社会」が語られるようになってきた。上の祭りには、日本の行政、教育団体なども協賛、後援に名を連ねるようになってきた。このように「在日文化」は、現代日本の多元的文化展開の一領域として「公共化」して来ているといえよう。

在日の「祭り」の公共化は、日本社会の少数者への文化的「寛容性」の拡大ということもできるかもしれない。しかし一方で同時に、日本人の自民族中心的・排外的傾向が強まってきている徴候もみられる。今後は、この相反する二つの動きが、交錯しつつ展開していくことが予想さ

れる。

7. 検討課題

本研究会での報告後の質疑で次の諸点が論議された。本格的な考察は今後の課題であるが、ここで若干のコメントを付しておきたい。

1. 生活文化の均質化が、在日文化の公共化の前提条件となること。

在日の祭りの「公共化」、すなわちそれが日本社会で表現され受容される前提条件として、在日の生活文化がすでに日本人のそれと十分に均質化していることがあげられよう。共通の衣食住文化、言語、思考法、感性、表現方法があり、そのなかで「民族的」文化創造は、「差異」として価値を主張し得るものとなる。文化的均質化のなかでの「差異」として「民族」文化が、在日自身のみならず日本人にもプラスの意味があるものとして現れてくるのである。またこれらの「祭り」は、特定団体の行事としてではなく、現代の日本文化における「地域イベント」としての「祭り」というカテゴリーのひとつとしてアピールしうるものとなっている。

2. 地方自治体の対応

報告では、「祭り」を作る在日の行動に重点がおかれていたが、「公共化」を論じるためには、それに場所を提供したり、「協賛」したりする地方自治体、教育委員会などの対応も重要であろう。近年「共生」が、地方自治体の課題の一つとして採用されており、その施策の実態との関連でみていくことが必要である。

3. 宗教的「寛容」と社会的「寛容」

「寛容」は、もともと唯一の正統の教義以外を暴力的に排除してきたキリスト教の歴史のなかで、長年の葛藤を経て形成されてきたパラドキシカルな宗教思想史的概念である。しかし、現代日本の文化活動において、同じ思想史的文脈は適合せず、むしろ固有の文化史的文脈と社会心理的状况を考察することが必要となるだろう。すなわち、在日の文化形成の流れと、少数民族への排外と受容の間を揺れ動く日本社会の集合的心理状況の交錯するところに、現在および今後の、在日文化の「公共化」と日本社会の「寛容性」の現実が位置するのではないと思われる。

4. マスコミの役割

在日の「祭り」の顕在化、公共化については、マスコミの役割を考察

しなければならぬ。ここでは、2002年11月15日にNHK、BS2で全国放送された「河原町通り 東九条界限 京の都のコリアンタウン」(25分、NHK京都製作、「京都上がる下がる」シリーズ)について考えてみたい。大阪市生野区は、「在日の町」としてすでによく知られているが、「東九条」については京都市民でも知らない人が多いのではないだろうか。単に知られなかったというより、むしろ、いくつかの被差別地域の名とともに、町の名そのものを公然と語ることが避けられていたのではないかと思われる。「京都上がる下がる」は、京都の通りとそこに生きる人々を紹介するシリーズ番組である。そのなかで、三条や四条、河原町や烏丸といった、京都の代表的な街路と並んで東九条が取り上げられたことは、新鮮な驚きであった。案内役は、イタリア語テレビ講座で知られているジローラモ・パンツェッタ氏で、京野菜のキムチを売る店や韓国風激辛お好み焼きの店に続いて、東九条マダンがメインの内容として紹介された。祭りのピラの貼られた町の様子、祭りの練習風景から、農楽の練習に参加していたある日本人の少女に焦点が移り、自宅でのチャング(長鼓)の練習とインタビューが写る。「日本人やのになんで韓国の楽器をやってるの?と聞かれることもあるけど、そんなこと考えたことあらへん。保育園のときにチャングを習って、それ以来好きになって続けているだけ。」と答える。そして次に、彼女が出た東九条の保育園をジローラモ氏が訪ね、そこで園児達に日本と韓国と両方のあいさつや衣服や歌・踊りなどが教えられる場面が写される。ここで教わった事を卒園後も習い続ける子供達があり、このような活動の続きとして「祭り」が生まれたと、東九条マダンの創始者である崔忠植(チェ・チュンシク)園長が語る。そして祭りでの農楽の本番風景とその後の、少女や参加者達の感激の涙が映し出される。

この番組の正確な視聴者数は分からないが、見た者には「東九条」の名が、京都の中の独特の魅力を持つ町として強い印象を残すことであろう。在日の「祭り」とともに、これまで語られなかった「東九条」が、マス・メディアを通して「公共化」されたことの意義は小さくないだろう。

5. 方法論の問題：場所の自己組織性

大阪市生野区や生駒山地といった「場所」について、筆者は、これまで宗教活動や祭りの舞台枠として形態論的に考えてきたが、「場所」の

社会的・文化的特質そのものが自己組織活動の過程的所産であることが指摘され、新たなアプローチが可能であることに気づかせられた。例えば、「大阪」は在日の複数の祭りの「舞台」であるにとどまらず、新たな祭りを通して「大阪」のイメージそのものが変容しうるわけである。

【参考文献】

- 飯田剛史 2002 『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社
今田高俊 1986 『自己組織性 社会理論の復活』創文社
上田正昭 1997 「四天王寺ワツソと難波の再生」、同『東アジアと海上の道 古代史の視座』明石書店
小川伸彦 2003 「民族まつりへのアプローチ 京都・東九条マダン研究序説」、
『奈良女子大学社会学論集』第10号
ベラー, R.N. 1974 『宗教と社会科学の間』葛西実・小林正佳 編訳 未来社

（富山大学経済学部教授）